

ツォンカパ著『密意解明』における菩薩の修道階梯 ——滅尽定を中心として——

太田 露子

1 はじめに

本稿は、ツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357–1419) によって著された『密意解明』(dbu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dGongs pa rab gsal) における菩薩の修道階梯の一側面を確認するものである。

『密意解明』は、チャンドラキールティ (Candrakīrti, ca. 600–650) の主著『入中論』(Madhyamakāvatāra) に対する註釈書である。『入中論』の構成は、『十地経』(Daśabhūmikasūtra) において説かれた菩薩の修道階梯に基づき、各章が十地のそれぞれに対応している。このことは、『入中論』が中観思想の立場から、菩薩の修道体系を確立しようとした論書であることを示している。そして、言うまでもなく『入中論』の注釈書である『密意解明』も同じ構成を取って著されている。

本稿では、その『密意解明』の菩薩階梯を検討する際に、第六地から第八地の菩薩地の展開において重要となる「滅尽定」の詳細を明らかにすることを主題とする。滅尽定とは、初期仏教の伝統では、四禅定・四無色定の上にある最高位の禅定であるとされ、それらをまとめて九次第定という。そして、『十地経』は菩薩の修道階梯を描く際に、この初期仏教以来の禅定の枠組みである九次第定を十地の中に取り入れている。このことは、菩薩が第三地において四禅定・四無色定を体得すると説かれ、滅尽定に関して、「順々に〔禅定に入り〕第九番目の〔禅定である〕滅尽〔定〕に入定する。〔そうすれば、〕あれこれうごく心の働きも、流動する分別も消えうせる⁽¹⁾」と述べられていることから確認できる。また、『十地経』の菩薩階梯における滅尽定は、第七地の記述において「第六の菩薩地において、菩薩は滅に入定する⁽²⁾」と示されている⁽³⁾。この記述から、滅尽定は菩薩が第六地で体得する禅定として設定されていることが理解できる。しかし、『十地経』で説かれている滅尽定は、あくまでも修道プロセスにおける禅定としてのみ説かれており、それ以上の記述を見出すことはできない。

一方、チャンドラキールティは、『入中論』において、上述した『十地経』の禅定論の枠組み——菩薩は第三地で四禅定・四無色定を体得し、第六地において滅尽定を得る——をそのまま踏襲している。その中でも滅尽定が、第六地において人法二無我に対する微細な考察(*vicāra)の後に得られ、第七地で刹那ごとに入定する仕方を経て、第八地で出定するという流れをもつ⁽⁴⁾。さらに、チャンドラキールティは滅尽定を真如(*tathatā)・實際(*bhūtakoti)に入定することと定義する⁽⁵⁾。しかしながら、『入中論』では滅尽定についての記述が少ないため、菩薩階梯における滅尽定の具体的位置づけや、具体的意味内容を完全に解明することが

できない。

それに対して『密意解明』では、その滅尽定が「帰謬派独自の滅尽定（'gog pa la snyoms par 'jug pa thun mong ma yin pa）」と注釈され、第六地から第八地の菩薩階梯が、滅尽定を中心に描かれていることを確認することができる。Klein (1994) は、この『密意解明』第六章において述べられる「独自の滅尽定」に関して論じ、「自性空性」を対象とする等至（mnyam bzhag）であると述べている。そしてさらに、この「独自の滅尽定」は帰謬派のみにおいて説かれ、他宗が説く滅尽定より勝れていると定義する（Klein 1994, 37）。しかしながら、Klein (1994) では、菩薩階梯の段階と共に滅尽定の展開を検討することはなされていない。

そこで本稿では、第六地から第八地の菩薩地の記述を段階的に検討することから、『密意解明』における滅尽定の重要性、具体的意味内容を明確にし、併せて、各菩薩地と滅尽定との関係性を明らかにしてゆきたい。なお、結論を先取りするならば、『密意解明』における「滅尽定」は単なる禪定の一段階ではなく、菩薩が到達すべき真実を意味内容としている。そして、その真実に対する菩薩の有様が、第六地から第八地の各菩薩地において移り変わってゆくことが確認できる。このことを以下の検討において明らかにしてゆきたい。

2 『密意解明』の菩薩階梯における滅尽定

2.1 第六地（現前地）

—菩薩は縁起を見ることから「独自の滅尽定」を得る—

・『入中論』第六地

現前（*abhimukha）〔地〕に等至している心に住し、等覚者の法を現前にし、これを縁として生ずるという真実を見る彼（菩薩）は、般若〔波羅蜜〕に住することによって、滅を得るであろう⁽⁶⁾。(VI.1)

以上のように、智慧の光により光明が明るくなり、自らの手の中にあるアーマラカのように、これら三有は残りなくはじめから生じることがないと証得した彼（菩薩）が、言説諦の力によって滅に至る⁽⁷⁾。(VI.224)

第六地は、チャンドラキールティによって、菩薩が修行道を歩み仏陀となる上で、要となる菩薩地として設定されている。それゆえ、第六章は、『入中論』・『密意解明』共に全体の六割を越える比率をもって著されている。そしてツォンカパは、この第六地において菩薩が得る徳性を『密意解明』第六章の冒頭で以下のように述べている。

sa lnga par bsam gtan gyi phar phyin yongs su dag pa thob pas / sa drug pa mngon du phyogs pa ste gyur par mnyam par bzhag pa'i sems phul du byung ba la gnas te / de la brten nas rten cing 'brel par 'byung ba rkyen nyid 'di pa tsam gyi zab mo'i de kho na nyid mthong ba'i byang sems sa drug pa la gnas pas ni / shes rab kyi pha rol tu phyin pa phul du byung ba la gnas pas 'gog pa thob par 'gyur gyi / de'i snga rol sa lnga pa sogs su ni 'gog pa thob pa min

te / sher phyin phul du byung ba'i lhag pa med pa'i phyir te / (GR, 小川 1988, 9.7-13; Z 63a4-6, K 72a6-b2, P 63b7-64a2)

第五地において清浄なる禪定波羅蜜を得たので、第六現前地 (mngon du phyogs pa)、すなわち、現前 (mngon du gyur pa) [地] に等至している最勝なる心に住し、それに依りて、「縁起」すなわち「此縁性のみ」という甚深なる真実を見る第六地に住する菩薩は、般若波羅蜜の最勝性に住することによって、「滅」を得るのであるが、それより以前の第五[地] などにおいては「滅」を得ることはない。般若波羅蜜の最勝性が勝れていないからである。

ここから確認されることは、まず第六地の菩薩の修習対象が縁起（此縁性のみ）であり、その修習は第五地で菩薩が獲得した禪定波羅蜜⁽⁸⁾と第六地に至って菩薩が獲得する般若波羅蜜に依るということである⁽⁹⁾。また、その縁起に対する考察から「滅尽定」を得ることが、第六地の菩薩の最終目的とされる。

上記の記述は、おおよそチャンドラキールティに従った解釈であるが、ツォンカパは、さらに一歩踏み込んで、禪定波羅蜜と般若波羅蜜を「止」と「観」とに対応させる解釈を提示している。

zhi gnas ji tsam khyad zhugs pa tsam gyis lhag mthong de tsam du khyad zhugs par 'gyur la / sa lnga par bsam gtan gyi phar phyin phul du byung ba thob pas / de la brten nas 'dir sher phyin phul du byung ba yin no // de'i phyir 'gog pa la snyoms par 'jug pa thun mong ma yin pa 'di nas 'thob pa yin no // (GR, 小川 1988, 10.13-16; Z 63b4-5, K 73a1-2, P 64b7-8)

止にすぐれて悟入すればするほど、観にもすぐれて悟入することになるのである。〔だから、〕第五地において、禪定波羅蜜の最勝性を得たことによって、それに抛りて、ここ（第六地）で、般若波羅蜜の最勝性を〔得る〕のである。それゆえに、〔帰謬派〕独自の滅尽定がここ（第六地）から得られるのである。

以上のように、ツォンカパにおいては、第五地で獲得される禪定波羅蜜が止 (zhi gnas)、第六地で得られる般若波羅蜜が観 (lhag mthong) となる。ツォンカパは、『密意解明』の他の箇所でも「〔十地の中で〕第五地と第六地の次第によって、禪定〔波羅蜜〕の自体である止 (zhi gnas) に抛りて、二無我の真実をそれぞれ理解する般若〔波羅蜜〕によって考察すること (dpyod pa) という観 (lhag mthong) を修習することをお説きになった⁽¹⁰⁾」と述べている。このことから、止観に対応させる仕方で『入中論』の第五地から第六地の構成をとらえていることが理解できる。

以上のことから、第六地の菩薩の修習対象であり、第六地の記述の大半を占める、人法二無我を考察することから縁起を体得する次第は、すべて観の修習に包摂されるといえる。そして、ツォンカパは、禪定波羅蜜である止と般若波羅蜜である観の修習から得られる定を「〔帰謬派〕独自の滅尽定 ('gog pa la snyoms par 'jug pa thun mong ma yin pa)⁽¹¹⁾」と位置づけるのである。そして、以上のように滅尽定を得ることが第六地の菩薩の最終目的として設定される

ため、ツォンカパは第六章の結びにおいて第六地の菩薩の徳性を以下のように提示している。

sngar bshad pa'i nam pa de ltar nam par dpyad pa las byung ba'i blo gros kyi 'od zer gyis de kho na nyid mthong ba la gegs byed pa'i mun pa 'joms pa'i snang ba gsal bar byas pa'i byang sems rang gi lag na gnas pa'i skyu ru ra rlon pa'i 'bras bu bzhin du / srid pa gsum po 'di dag ma lus pa gdod ma nas rang bzhin gyis skye ba med par mngon sum du rtogs pa de yang ni / tha snyad pa kun rdzob bden pa'i stobs kyis te kun rdzob tu 'gog par 'gro ba ste de la snyoms par 'jug go / (GR, 小川 1988, 335.17–336.3; Z 241b6–242a2, K 261b4–262a1, P 245b7–246a2)

上述した以上のような相を考察することから生じた智慧の光により、真実を見ることを覆う闇を破る光明が明るくなった菩薩であり、自らの手の中にある新鮮なアーマラカの果実と同様に、これら三有は残りなくはじめから自性によって生じることがないと現前に証得する彼（菩薩）が、言説、つまり、世俗諦の力によって、すなわち、世俗において滅を得る。すなわち、そこ（滅）に入定する。

「上述した以上のような相」とは、ツォンカパの言葉で表現するならば「甚深なる縁起を理解するための真実」であり⁽¹²⁾、それは第六章で綿密に示された人法二無我の議論を指している。すなわち、『密意解明』における第六地は、菩薩がそのような縁起を考察することから、自性により生じることがないという無自性を証得し、「滅」に入定するというプロセスをもつ。

2.2 第七地（遠行地）

—菩薩は刹那ごとに滅に入定し出定する—

・『入中論』第七地

〔菩薩は〕この遠行〔地〕においては、刹那、刹那において、滅に入定し、方便波羅蜜がよく燃え盛ることを得る⁽¹³⁾。(VII.1abc)

菩薩は、第七地において方便波羅蜜に対する善巧を得るとされる。そして、第七地では、第六地で得た滅尽定への入定の仕方がより高度な入定の仕方へと変化する。このことが『入中論』では「刹那、刹那において滅に入定する」と表現される。対して、ツォンカパは以下のよう述べる。

sa bdun pa ring du song ba 'dir ni / sa drug par thob pa'i 'gog pa de la skad cig dang / skad cig ste skad cig re re la byang sems 'di snyoms par 'jug par 'gyur te / 'gog pa la 'jug pa ni yang dag pa'i mtha' la snyoms par 'jug pa yin pas / de bzhin nyid la 'gog pa zhes brjod de / 'phags pa'i mnyam gzhas gi skabs su de bzhin nyid 'dir gnyis snang gi spros pa thams cad 'gog par 'gyur ba'i phyir ro // (GR, Z 242b3–4, K 262b2–4, P 246b3–5)

この第七遠行地においては、第六地において得たかの滅に刹那刹那、すなわち、それぞれの刹那においてかの菩薩は入定するのである。滅に入定するとは、実際に入定することで

ある。それゆえ、**真如を滅**と説いた。聖者の等至の折に、その真如において、すべての二顯現の戲論を滅することになるからである。

この記述から第七地の菩薩は、滅尽定に一瞬ごとに入り、出る、という能力を得ていることが理解できる。そして、当該箇所では、滅尽定 ('gog pa la snyoms par 'jug pa; *nirodhasamāpatti) の滅 ('gog pa; *nirodha) が、真如 (de bzhin nyid; *tathatā)、実際 (yang dag pa'i mtha'; *bhūtakoti) と言い換えられている。この真如・実際という換言は、チャンドラキールティに従っている⁽¹⁴⁾。さらにツォンカパは、その境地を等至のときに、真如において、主観的な現れも客観的な現れもない戲論寂滅の境地に入ることであると示す立場をとる⁽¹⁵⁾。この滅尽定の滅が真如・実際・戲論寂滅と表現されることから、ツォンカパにおける滅尽定が真実・空性を現前に証得する禪定であることが理解できる。

また、『十地経』では、第七地の菩薩が声聞・独覚を自らの「智の力」によって凌駕すると説かれている⁽¹⁶⁾。チャンドラキールティもこの『十地経』の解釈を受け継いでおり、「般若によって打ち負かす⁽¹⁷⁾」と表現する。この場合、声聞・独覚を打倒する般若とは、第六地で縁起を考察した般若波羅蜜に他ならない。つまり、チャンドラキールティは、第六地の菩薩において善巧となる般若波羅蜜を重要視し、『十地経』の説く声聞・独覚を凌駕する「智」に関して縁起を考察 (*vicāra) する般若波羅蜜の智と解釈していたことをうかがわせる。

これに対して、ツォンカパは、声聞・独覚も菩薩と同じように真実・空性を現前に証得する智があると主張するため、『十地経』が説く「この第七菩薩地に住する菩薩は、自らの対象を知ることの広大さに住しているので、すべての声聞・独覚の所作を超越しているのである⁽¹⁸⁾」という一節を「自らの対象を知ることの広大さに住しているので、ということは、滅、すなわち、実際を知ることの広大さである⁽¹⁹⁾」と解釈する。つまり、菩薩は自らの対象である「滅・実際」を知る仕方が秀逸となること、そのような智のあり方において、声聞・独覚を凌駕するのである⁽²⁰⁾。この点に関しては以下の記述からも確認できる。

'di la de kho na nyid kyi rtogs pa'i steng nas khyad par gzhag dgos par snang ngo // de yang yang dag pa'i mtha'i de kho na nyid la 'jug ldang gi sgo nas yin te / sa bdun pa'i skabs su 'chad pa ltar sems kyi skad cig re re la 'gog pa yang dag mtha' la 'jug ldang byed pa sa 'di nas nus la / sa 'og mar mi nus par gsungs pa yin no // (GR, Z 25b6–26a1, K 29b6–30a2, P 26a4–5; Hopkins 1980, 148.19–25)

ここに真実の証得という点で、〔声聞・独覚と七地以上の菩薩との〕違いを設定する必要があると思われる。それも**実際**という**真実**に入定し、出定するという点からである。第七地の章において説明したように、それぞれの心の刹那に**滅**すなわち**実際**に入定し、出定することはこの地（遠行地）から可能であって、下位の地においてはできないとお説きになられた⁽²¹⁾。

このように、第七地の菩薩が声聞・独覚を凌駕する理由を滅への入定の仕方を通して設定することは、心と真実とが水に水をあわせたように一味である滅尽定の状態から、刹那ごとに入

定と出定を繰り返すことが非常に困難なこととして考えられているからである⁽²²⁾。声聞・独覚たちであれば、真実を現前に証得できたことのみで満足して滅にとどまり続けるが、第七地の菩薩は、寂靜なる滅尽定に長く入定していようとせず、刹那ごとに出定する。この点にツォンカパは、第七地以上の菩薩の優位性を描き出している⁽²³⁾。

2.3 第八地（不動地）

—菩薩は諸仏によって滅から起こされる—

・『入中論』第八地

何度も何度も、以前の善根よりも勝れたものを得るために、不退転となるこの不動地にかの大士（菩薩）は、入る⁽²⁴⁾。彼（菩薩）の願〔波羅蜜〕は極めて清浄になり、勝者たちが〔菩薩を〕滅から起き上がらせる⁽²⁵⁾。（VIII.1d-2）

この偈が示すように、第八地の菩薩は不退転となり、願波羅蜜を得る。そして、チャンドラキールティは、第八地の菩薩が、第六地で得た滅に入定していると諸仏によって、その禪定の状態から起こされる、と示している。このことに対してツォンカパは、次のように述べる。

sa mi g-yo bar 'gog pa chos nyid la zhugs pa na / rgyal ba rnams kyis 'gog pa la zhugs pa de las slong bar yang mdzad de / （GR, Z 244a3-4, K 264a3-4, P 248a2-3）

不動地において滅、すなわち、法性に入定したときに、勝者たちは滅に入定しているそこから〔菩薩を〕起き上がらせる。

当該箇所では滅が法性（*dharmatā）と言い換えられ、諸仏がそこに入定している菩薩を起こす有様が説かれる。この諸仏が、第八地で菩薩を禪定の中から起こす所以は、第八地の菩薩は、極まった滅尽定に入定するため、この位が最終到達地点であると考え、出定せずに般涅槃してしまう可能性が非常に高いからである⁽²⁶⁾。しかしながら、菩薩は滅・実際に入定することにおいて真実の証得を得て、解脱の境地に安住することができたとしても、有情はさまざまな煩惱に没落して苦しんでいる。そのことに目をむけさせ、途切れることなき利他行を遂行させるため諸仏が菩薩を滅尽定から起こすのである。

さらに、第八地の記述に見られるツォンカパの独自性は、滅尽定が無分別智と結びつく形で示される点にある。ツォンカパが依拠するチャンドラキールティは、無分別智というタームを積極的に用いることはないが、ツォンカパは空性を現前に証得する三昧智を無分別智として理解している。つまり、真如・實際を現前にする滅尽定も無分別智が生じた状態として示される。そのことを表しているのが以下の一節である。

de dag gis ni sa brgyad par rnam par mi rtog pa'i ye shes la dbang sgyur thob nas / de tsam la mnyam par bzhag pa na / de las bslangs nas sangs rgyas kyi stobs la sogs pa thob pa'i rgyur rjes thob tu tshogs gsog pa la bskul zhing / （GR, Z 244b6-245a2, K 265a1-2, P 248b5-7）
彼ら（菩薩）は、第八地において無分別智についての自在を得て、それのみに入定してい

るとき、そこから出定して、仏の〔十〕力などを得る因として、後得〔智〕において資糧を集積することを〔諸仏が〕勧める。

ここで示されているように、ツォンカバは第八地の菩薩が無分別智を自在に操れる力を得ていると定義する。上記の一節から、滅尽定の具体的内容が無分別智によって法性・真実を現前にする禅定であるということが理解できる。しかし、この無分別智は声聞・独覚によっても得られるというのがツォンカバの立場であるから、菩薩が仏になるためには、後得智における有情への菩薩行が重要なこととなる⁽²⁷⁾。そこで、先にも確認したように、滅尽定からの出定ということが重要とされるのである。そして、滅から出定した菩薩の有様は次のように表現される。

gang gi phyir sa brgyad pa 'dir rgyal ba mams kyis 'gog pa las slong ba de'i phyir sa 'dir / chags pa med pa'i blo ste ye shes ni chags sogs nyon mongs pa'i skyon mams dag dang lhan cig tu mi gnas pa'i phyir / sa brgyad pa la ni mnam par mi rtog pa'i ye shes kyi nyi ma shar bas / mun pa lta bu'i dri ma ste nyon mongs pa sngar byung ba 'khor bar skye ba'i rgyur gyur ba / khams gsum na spyod pa de dag thams cad kyang rtsa ba ste sa bon dang bcas pa nye bar zhi ba ste spangs par 'gyur zhing / (GR, Z 245a2-4, K 265a3-5, P 248b8-249a3)

この第八地において勝者たちが〔菩薩を〕滅から起き上がらせるゆえに、それゆえに、この地において、無執着の智、すなわち、智慧が貪などの煩悩の諸過失と共に住していないから、第八地においては、無分別智の太陽が現れたことによる暗闇のように、垢、すなわち、過去に生じ、輪廻の生存の因となった、三界繫のそれらもろもろの煩悩すべても、根本、すなわち、種子を伴ったものを寂靜にする、すなわち、断じることになる。

この記述から無分別智に自在を得て滅尽定に入定していた菩薩が、滅尽定から出定したときに、その無分別智によってすべての煩悩を種子ごと断じたと理解できる。すなわち、菩薩階梯を順に制する中でもまだ断じられていなかった俱生の煩悩の種子が第八地で断じられたのである⁽²⁸⁾。しかしながら、煩悩の尽きたこの第八地の段階では、菩薩は諸仏のあらゆる徳性を得終わってはいない。それゆえ菩薩には、第八地以降の菩薩地におけるさらなる精進が求められるのである⁽²⁹⁾。

3 まとめ

以上、ツォンカバが『密意解明』第六章で「独自の滅尽定 ('gog pa la snyoms par 'jug pa thun mong ma yin pa)」と述べた滅尽定を第六地から第八地の展開の中で確認した。この節ではそれを総括しつつ、『密意解明』における滅尽定の具体的な意味内容を確認したい。

まず、『密意解明』における滅尽定の展開を確認すると、菩薩は、第六地において禅定波羅蜜（止）と般若波羅蜜（観）により縁起を考察（*vicāra）する。そして、その考察からあらゆる存在が無自性であるということを証得して、独自の滅尽定を得るとされる。第七地において

は、刹那ごとに滅へ入定と出定を繰り返すことが可能となり、そのような菩薩自身の対象である滅への入定の仕方が広大になることによって声聞・独覺を凌駕する。一方、第八地において菩薩は、滅尽定の中で無分別智についての自在を得る。そして、菩薩がそのような極まった滅尽定に入定していると、仏陀によって滅から起こされ、有情へのさらなる菩薩行の必要性が示される。ゆえに、菩薩は第八地で般涅槃することなく、第九地、第十地と菩薩道を歩み仏地を目指すのである。

そして、ここまでの確認から明らかであるように、『密意解明』においては、滅尽定 ('gog pa la snyoms par 'jug pa) という術語の中で、滅 ('gog pa) の語に主眼が置かれている。というよりも、むしろ滅のみが独立して述べられている用例が大多数を占める。そして、その「滅」が真如 (de bzhin nyid)・法性 (chos nyid)・實際 (yang dag pa'i mtha')・真実 (de kho na nyid) と言い換えられ、それらに入定する、あるいは出定する、というように表現される。また、ツォンカパは、聖者がこのような真実を禪定の中で証得する仕方を、「現前に (mngon sum du)」と表現する。すなわち、禪定の中で法性・真如を直接に理解するのである。さらに、滅が法性・真如と換言されていることから、滅は空性を意味するといえる。このことから、『密意解明』における滅尽定は単に禪定の一段階であるということのみならず、菩薩が体得すべき真理そのものがあらわされているといえよう。

それゆえ、ツォンカパにおいて、この「滅」とは滅諦の滅であるとも言い得る。ツォンカパは『密意解明』第五章において「滅諦のみが勝義諦である⁽³⁰⁾」というチャンドラキールティの主張を受けて、帰謬派では滅を現前に証得することは無漏なる三昧智によって、真実を証得することにより成就されると示している⁽³¹⁾。さらに滅諦は法性と同義であるという立場をとる⁽³²⁾。このような表現は今まで検討してきた滅尽定の滅の境地とまったく同じである。このことから、ツォンカパの理解する滅尽定は、滅諦と同義であると解釈することができる。つまり、滅諦であり、法性・真如である菩薩の証得すべき真実を禪定という形で表したのが、ツォンカパの言う「独自の滅尽定」なのである。

以上によって、そのような滅尽定の獲得と入出を中心に『密意解明』の第六地から第八地の菩薩階梯が構成されていることを確認し得た。

略号表

K	bKra shis lhun po edition.
DBhS	<i>Daśabhūmikasūtra</i> . In 梵文『大方広仏華嚴經十地品』 <i>Daśabhūmīśvaro nāma Mahāyānasūtram</i> . Ed. R. Kondō. Daijyō Bukkyō Kenyō-Kai. Tokyo, 1936.
GR	Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357–1419). <i>dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dgongs pa rab gsal</i> . Z: Tohoku No.5408; P: Otani No.6143; K: <i>The Collected Works of Tsong kha pa blo bzang grags pa'i dpal</i> . Vol.24. New Delhi, 1979.
D	Tibetan Tripiṭaka, sDe dge edition.
MA	Candrakīrti. <i>Madhyamakāvatārabhāṣya</i> . In <i>Madhyamakāvatāra par Candrakīrti, Traduction</i>

——ツォンカパ著『密意解明』における菩薩の修道階梯——

- Tibétaine*. Ed. Louis de la Vallée Poussin. Bibliotheca Buddhica IX. St. Pétersbourg, 1907–1912. (repr. Osnabrück, 1970; Tokyo, 1977). D 3862, P 5263.
- MAṬ Jayānanda. *Madhyamakāvatāraṭīkā*. D 3870, P 5271.
- P Tibetan Tripiṭaka, Peking edition.
- RĀ Nāgārjuna. *Ratnāvalī*. In *Nāgārjuna's Ratnāvalī Vol. I The Basic Texts (Sanskrit, Tibetan, Chinese)* Ed. Michael Hahn. Indica et Tibetica 1. Indica et Tibetica Verlag. Bonn, 1982.
- Z Zhol edition.

文献表

de La Vallée Poussin, L.

- 1907 “Madhyamakāvatāra, Introduction au Traité du milieu de l'Ācārya Candrakīrti, avec le commentaire de l'auteur, traduit d'après la version tibétaine.” *Le Muséon. n.s.* Vol.VIII, pp.249–317.
- 1910 “Madhyamakāvatāra, Introduction au Traité du milieu de l'Ācārya Candrakīrti, avec le commentaire de l'auteur, traduit d'après la version tibétaine.” *Le Muséon. n.s.* Vol.XI, pp.271–358.

Hopkins, J.

- 1980 *Compassion in Tibetan Buddhism*. Snow Lion, New York.

Huntington, C. W.

- 1989 *The Emptiness of Emptiness: an introduction to early Indian Mādhyamika*. University of Hawaii Press, Honolulu.

Klein, A. C.

- 1994 *Path to the Middle: Oral Mādhyamika Philosophy in Tibet*. State University of New York Press, Albany.

荒牧 典俊

- 1974 『十地経』（『大乘仏典』第8巻）中央公論社、東京。

小川 一乗

- 1976 『空性思想の研究』文栄堂、京都。
- 1988 「空性思想の研究Ⅱ——ツォンカパ造『意趣善明』第六章のテキストの和訳——」文栄堂、京都。

ツルティム・ケサン（白館 戒雲）

- 1996 「滅諦に関するゲルク派内における異見」『大谷学報』76-1、pp.21–35。

——ツォンカパ著『密意解明』における菩薩の修道階梯——

ツルティム・ケサン（白館 戒雲）・藤仲 孝司

2002 『ツォンカパ 中観哲学の研究V』文栄堂、京都。

2003 『ツォンカパ 中観哲学の研究IV』文栄堂、京都。

福田 洋一

2002 「ツォンカパにおける縁起と空の存在論——中観派不共の勝法について——」(http://tibet.que.ne.jp/archive/dbu_ma_pai_khyad_chos.pdf) (初出誌:『とんぱ』3、出帆新社、1999、pp.42-93)。

2004 「ツォンカパの中観思想における二つの二諦説」『大谷学報』83-1、pp.1-22。

松本 史朗

1981 「ツォンカパの中観思想について」『東洋学報』62-3/4、pp.174-211。

注

- (1) DBhS, 134.16-135.1: *anupūrveṇa navamaṃ nirodhaṃ samāpannaḥ / sarveṅjitamananāsyamditā-vikalpāpagato bhavati* / (荒牧 1974, 238.9-10)
- (2) DBhS, 122.13-15: *vimukticaṃdro bodhisattva āha // katamāṃ bho jinaputra bodhisattvabhūmim upādāya bodhisattvo nirodhaṃ samāpadyate // vajragarbho bodhisattva āha // śaṣṭhīm bho jinaputra bodhisattvabhūmim upādāya bodhisattvo nirodhaṃ samāpadyate / asyāṃ punaḥ saptamyām bodhisattvabhūmau pratiṣṭhito bodhisattvaś cittakṣaṇe cittakṣaṇe nirodhaṃ samāpadyate ca vyuttiṣṭhate ca* / 「解脱月菩薩が言う。「ああ、仏子よ。菩薩はいかなる菩薩地において、滅に入定するのか。」金剛藏菩薩は答える。「ああ、仏子よ。第六の菩薩地において、菩薩は滅に入定する。また、この第七の菩薩地に住している菩薩は、刹那刹那において、滅に入定し、また、出定する。」(荒牧 1974, 222.13-223.4)
- (3) 『十地経』の記述では、菩薩が第三地で体得する徳性は、四禅定・四無色定のみならず、四無量心・五神通が記されている。さらに、第四地において三十七菩提分法を修習し、第五地では四聖諦への善巧を得る。そして、その次の次第として滅尽定は第六地で得られるのである。
- (4) 龍樹が『ラトナーバリー』第五章第四十偈から第六十偈 (RĀ, 146-154) において示している菩薩の十地でも、第六地と第七地に滅尽定の記述がみられる。チャンドラキールティは『入中論』を著すにあたり、この『ラトナーバリー』の記述を重要視しているといえる。さらに、ツォンカパいたっては実際に『密意解明』の中に引用して理証として示している。以下にその滅尽定の記述がある偈頌を提示する。

śaṣṭhī tv abhimukhī nāma buddhadharmābhimukhyataḥ /

vipaśyanāśamābhyāsān nirodhāvāptipuṣkalā // V. 51 //

一方、第六番目の〔菩薩地〕は現前という名称である。仏陀の法に直面するゆえに。〔また、〕観と止を修習するから、滅が得られ、広大となるからである。

dūraṃgamā saptamī tu saṃkhyādūraṃgamānvayāt /

āpadyate nirodhaṃ ca yasmād asyāṃ kṣaṇe kṣaṇe // V. 53 //

一方、第七〔地〕は遠行地である。数がはるか遠くに至っているゆえに。ここ（遠行地）で刹那刹那において、滅に入定するからである。

——ツォンカバ著『密意解明』における菩薩の修道階梯——

また、MATにおいてジャヤーナダは、滅尽定を一貫して「空性を特徴とする三昧」と注釈している。(eg. MAT, P 375b3, D 312a3: 'gog par 'jug 'gyur zhing zhes bya ba ni stong pa nyid kyi mtshan nyid kyi ting nge 'dzin la'o //)

- (5) MA, 342.17–18, P 385a5–6, D 325b1: 'gog pa la snyoms par 'jug pa ni yang dag pa'i mtha' la snyoms par 'jug pa yin pas / de bzhin nyid la 'gog pa zhes brjod de. 「滅尽定とは、實際へと入定することであるから、真如を滅と述べる。」
- (6) MA, 73.2–5, P 292a5–6, D 244a3–4: mngon du phyogs par mnyam gzhas sems gnas te // rdzogs pa'i sangs rgyas chos la mngon phyogs shing // 'di rten 'byung ba'i de nyid mthong ba de // shes rab gnas pas 'gog pa 'thob (D thob) par 'gyur // (de La Vallée Poussin 1910, 272.6–10)
- (7) MA, 340.18–341.1, P 385a3–4, D 324b6–7: de ltar blo gros zer gyis snang ba gsal byas pa // rang gi lag na gnas pa'i skyu ru ra bzhin du // srid gsum 'di dag ma lus gdod nas skye med par // rtogs de tha snyad bden pa'i stobs kyi 'gog par 'gro //
- (8) GR, Z 61b4–6, K 70b5–6, P 62b1: sa lnga pa 'dir phar phyin bcu'i nang nas bsam gtan gyi phar phyin nyid ches lhag par 'gyur ro // de ltar bstan pa na sbyin pa nas brtson 'grus kyi phar phyin bzhi lhag par 'gyur ba / sngon nyid nas thob zin par shes pas / lhag ma drug gi nang nas zhes shes par 'gyur ro // 「この第五地において十波羅蜜の中で、禪定波羅蜜こそがますます勝れることになる。このように説いたけれども、布施から精進までの四波羅蜜も勝れている。〔これら四波羅蜜は〕以前の〔菩薩地〕において得終わったと知られている。だから、残りの六〔波羅蜜〕の中で、〔禪定波羅蜜がますます勝れる〕と知られることになる。」 (Hopkins 1980, 227.30–228.4)
- (9) チャンドラキールティ—ツォンカバは十波羅蜜を十地に配当する。この考え方は、『十地経』の初期の漢訳經典においては確認することができない (荒牧 1974, 374; n.2)。
- (10) GR, Z 3a6–b1, K 3a1–2, P 3b7–8: sa lnga pa dang drug pa'i go rim gyis bsam gtan gyi ngo bo zhi gnas la brten nas / bdag med pa gnyis kyi de kho na nyid la so sor rtog pa'i shes rab kyi dpyod pa'i lhag mthong sgom pa rnams gsungs so // (Hopkins 1980, 98.33–37)
- (11) 「独自の滅尽定」('gog pa la snyoms par 'jug pa thun mong ma yin pa) における「独自の (thun mong ma yin pa)」という形容を「帰謬派独自の」と理解すべきであるという点に関しては、ツルティム・ケサン教授より、ご教示いただいた。Klein (1994) でも同じ解釈がなされている。また、『密意解明』において、滅尽定に対して「独自の (thun mong ma yin pa)」という形容がなされているのはこの一ヶ所のみである。
- (12) ツォンカバは、『密意解明』第六章の科文を次のように述べている。

sa drug pa mngon du gyur pa bshad pa la bzhi / sa'i nges tshig dang sher phyin lhag par bstan pa / shes rab kyi phar phyin gyi bsngags pa / zab mo rten 'byung gzigs pa'i de kho na nyid bshad pa / sa'i yon tan brjod pa'i sgo nas mjug bsdu ba'o // (GR, 小川 1988, 9.2–5; Z 63a3–4, K 72a5–6, P 63b6–7)

「第六現前地として説かれる中に四節がある。〔第一に〕地の語義解釈と般若波羅蜜をさらに勝れて示すこと。〔第二に〕般若波羅蜜の称赞。〔第三に〕甚深なる縁起を理解するための真実を説くこと。〔第四に〕地の徳性を述べるという点から結論とすること。」(GR, 小川 1988, 9.2–5; Z 63a3–4, K 72a5–6, P 63b6–7) この中、「甚深なる縁起を理解するための真実を説くこと」が第六章の大半を占める。そこにおいて、法無我を『中論』第一章第一偈において示される四不生に基づいて証明すること。また、人無我を五種あるいは七種の考察 (dpyod pa; *vicāra) によって証明することがなされている。また、その議論の間で二諦説や、唯識批判等が展開されるが、ツォンカバはそれらをすべて「縁起を理解するための真実を説くこと」と理解している。

- (13) MA, 342.14–16, P 385a5, D 325a7–325b1: ring du song ba (P ba'i) 'dir ni skad cig dang // skad cig

——ツォンカパ著『密意解明』における菩薩の修道階梯——

la ni 'gog par 'jug 'gyur zhing // thabs kyi pha rol phyin legs 'bar ba thob //

- (14) 注(5)参照。
- (15) 滅尽定の境地は「〔主客〕二顕現の戲論の止滅」と説明されるが、ツォンカパは、「正覚していない聖者たちは所知障の無明を断じていない。それゆえ、後得の顕現を有する思惟と、等至において無顕現になることとの移り変わりがある (GR, 小川 1988, 91.7–9, Z 108a3–4, K 121a2, P 108a6–7: sangs ma rgyas pa'i 'phags pa rnams kyis ni shes sgrib kyi ma rig pa ma spangs pas / rjes thob kyi snang bcas kyi rtog pa dang / mnyam gzhas tu snang med du 'gyur ba'i res 'jog yod la /)」と述べているため、等至において主客観の現れのない対境を有したとしても、後得においては顕現する対境が生じる。
- (16) DBhS, 122.1–6 (荒牧 1974, 221.8–222.1) 参照。
- (17) MA, 342.1, P 385b1–2, D 325a5: shes rab kyis pham par byed do //
- (18) DBhS, 122.5–6: asyām tu saptamyām bodhisattvabhūmau sthito bodhisattvaḥ svaviśayajñānaviśeṣa-māhātmyāvasthitatvāt sarvaśrāvakapratyekabuddhakriyām atikrānto bhavati / (荒牧 1974, 221.15–222.1)
- (19) GR, Z 25a3–4, K 29a2, P 25a8–b1: blo'i stobs 'chad pa na rang gi yul shes pa'i che ba la gnas pas / zhes pa ni byung sems rang gi yul 'gog pa yang dag pa'i mtha' shes pa'i che ba'o // 「『十地經』において〕智の力が説明された時に「自らの対象を知ることの広大さに住しているの」ということは、菩薩自らの対象である、滅、すなわち、実際を知ることの広大性である。」(Hopkins 1980, 146.25–31)
- (20) この菩薩と声聞・独覚の差をどこに設定するかということに関しては、『入中論』第一章第八偈に対する注釈において議論されている。
- (21) 当該箇所はツォンカパの師であるレンダーク (Red mda' ba gZhon nu blo gros, 1349–1412) が *dBu ma la 'jug pa'i rnam bshad De kho na nyid gsal ba'i sgron ma* の第七地の注釈において述べていることに従っている (ツルティム・藤仲 2002, 46; 2003b, 242)。
- (22) GR, Z 26a1–3, K 30a2–3, P 26a6–7: mos spyod du sems dang de kho na nyid gnyis ro gcig tu ma song ba'i stong nyid kyi ting nge 'dzin la dus thung ngur 'jug ldang byed pa mi dka' yang / sems dang de kho na nyid gnyis chu la chu bzhag pa bzhin du song ba'i 'phags pa'i skabs su / 'jug ldang gi tshul de shin tu dka' ba'i phyir ro // 「信解行〔地〕において心と真実の二つが一味になっていない空性の三昧に短い時間、入定し、出定することは難しくないけれども、心と真実の二つが水に水を置いたようになった聖者の位において、〔空性の三昧に〕入定し、出定するその仕方は非常に難しいからである。」(Hopkins 1980, 148.25–32)
- (23) ケードゥブジェ (mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1385–1438) も *sTong thun chen mo* において、この刹那、刹那に滅に入定する仕方によって、第七地の菩薩は声聞や独覚に打ち勝つことが可能になると示している (ツルティム・藤仲 2003b, 76–77)。
- (24) MA, 343.15–17, P 385b3, D 325b5–6: yang yang sngar dge las lhag thob bya'i phyir // gang du phyir mi ldog pa nyid 'gyur ba // mi g-yo de la bdag nyid che de 'jug /
- (25) MA, 344.16–17, P 385b8–386a1, D 326a3: 'di yi smon lam shin tu dag 'gyur zhing // rgyal ba rnams kyis (P kyi) 'gog las slong bar mdzad //
- (26) このことは以下の『十地經』からの引用をもって示される。
DBhS, 137.4–5: te ced buddhā bhagavantas taṃ bodhisattvam evaṃ sarvajñajñānābhinirhāramukheṣu nāvatārayeyus tad evāya parinirvāṇaṃ bhavet sarvasattvakāryapratiprasrabdhī ca / 「もし、かの仏陀

——ツォンカパ著『密意解明』における菩薩の修道階梯——

世尊たちが、かの菩薩を、この様にすべてを知る智慧が顕れ出る門に悟入させないならば、彼は、またたくまに、般涅槃してしまうだろう。また、すべての有情のために為すべき利益も放棄してしまうだろう。」(荒牧 1974, 244.16-245.3)

- (27) GR, Z 245a1-2, K 265a2-3, P 248b7-8: chos nyid mngon sum du rtogs pa'i mi rtog ye shes nyan rang gis kyang 'thob par gsungs pas / de kho na nyid kyi rtogs pa yod na tshogs gzhan gsog pa la 'bad pa mi dgos kyi / de nyid la goms pas chog go zhes pa ni mi mkhas pa'i bab col du smra ba'o / 「[ある人が]『法性を現前に証得する無分別智は声聞・独覚によっても得られると説かれたので、真実の証得があるならば、他の資糧を集積することに対する努力は必要ないから、真実を修習するだけで十分である』というのは、巧みでなくばかげたことであると述べる。」
- (28) ツォンカパは、有染汚の無明を煩惱障であると考え、菩薩がその煩惱障を完全に断じることが可能なのは第八地であるという立場を取る。このことに関しては松本 (1981, 194-195) 参照。
- (29) Z 245a4-6, K 265a5-7, P 249a3-5: de ltar nyon mongs pa thams cad zad cing sa gsum ste kham s gsum gyi bla mar gyur kyang / byang sems 'dis nyon mongs zad pa'i gnas skabs der / sangs rgyas rnams kyi ni yon tan gyi 'byor pa mkha' ltar mtha' dang bral ba ma lus pa 'thob par nus pa ma yin pas / de thob par bya ba'i phyir sa bgyad pa ba 'dis bsgrim par bya dgos so // 「以上のようにすべての煩惱が尽き、三地、すなわち、三界の師になったとしても、かの菩薩は煩惱が尽きたこの位においては、虚空のごとき、〔二〕 辺を離れた諸仏の徳性の財宝をあますところなく得ることができるのではない。それゆえ、それを得るために、この第八地にいる彼(菩薩)は精進すべきである。」
- (30) MA, 71.3-5, P 291a8-b1, D 243a7-b1: de la sdug bsngal dang kun 'byung dang lam gyi bden pa ni kun rdzob kyi bden pa'i khongs su gtogs so // 'gog pa'i bden pa ni don dam pa'i bden pa'i rang gi ngo bo'o // 「この〔四聖諦の〕中で苦・集・道という諦が世俗諦の中に属する。滅諦は勝義諦を自体とする。」(de La Vallée Poussin 1907, 313.25-27)
- (31) GR, Z 62a6-b1, K 71b1-2, P 63a2-4: rang lugs la 'gog pa mngon sum du shes pa mnyam gzhas zag med kyi ye shes kyi // de kho na nyid kyi don rtogs pa'i steng nas bsgrubs pas / 'gog bden kun rdzob kyi bden pa yin na mnam bzhas de dag gtan mi rung zhing / 「自宗(帰謬論証派)においては滅を現前に知ることは、無漏なる三昧智によって、真実の意味を証得することに基づいて証明される。それゆえ、滅諦が世俗諦であるならば、これらの学説がまったく不合理である。」(Hopkins 1980, 229.5-10; ツルティム 1996, 24.4-7)
- (32) Z 63a1-2, K 72a3-4, P 63b3-4: chos can khyad par can la ni chos nyid kyang dag pa phyogs gcig pa tsam gyis mi chog gi / rang rang gi skabs kyi glo bur gyi dri mas kyang dag pa re dgos la de nyid la 'gog bden zer ba yin no // 「特定の有法においては法性といえども清浄なる面ひとつのみでは不十分であり、それぞれの段階での偶発的な垢からもそれぞれ清浄であるという〔面〕も必要であり、まさにその〔ような法性〕を滅諦と言うのである。」(Hopkins 1980, 230.14-18; ツルティム 1996, 25.1-4; n.12) このように、ツォンカパは滅諦は法性と同義であるとする。一方、ツルティム (1996) が指摘するように、滅諦を法性・真如・空性の同義語と定義することに関しては、ゲルク派内でも意見は一致していない。異見を主張する者としては、パンチェン・ソナム・タクパ (Pang chen bSod nams grags pa, 1478-1554) がいる。彼によると滅諦は勝義諦ではあるが、法性・真如・空性であるとはいえないとされる。

謝辞

チベット語の読解にあたっては、大谷大学のツルティム・ケサン教授、福田洋一教授に御指導頂きました。また、本論文をまとめるにあたり、兵藤一夫教授から御教示をいただきました。末筆ながら記して謝意を表します。